

パネルディスカッション (2004年度公開シンポジウム報告「トラウマ概念の再吟味 - 埋葬と亡霊 -」)

著者	加藤 寛, 白川 美也子, 高橋 哲哉, 森 茂起, 中井 久夫, 港道 隆, 横山 博
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	6
ページ	40-58
発行年	2005-02-17
URL	http://doi.org/10.14990/00002535

パネルディスカッション

シンポジスト

加藤 寛
白川美也子

高橋 哲哉

森 茂起

指定討論者

中井 久夫

司 会

港道 隆
横山 博

横山：それでは第二部の討議と質疑応答に入ります。最初に指定討論者の先生方からご意見をいただき、続いて討論に入りたいと思います。では、まず港道隆先生からお願いします。

港道：僕は高橋さんと同じく哲学をやってきた人間で、直接心理学的な意味でのトラウマ概念に付き合ってきた人間ではありません。しかし、去年から森さんと一緒に大学院の授業をしていて、そこでトラウマや解離の問題を議論しながらいろいろ教えていただき、その縁でこの席に「お前も何か喋れ」ということで引っぱり出されました。

僕が申し上げたいのはごく単純なことです。それは、精

神分析や心理学の場面で言われるようなトラウマや外傷や解離や抑圧といった概念が社会のレベルに適用できるとしたら、それはどのような条件が必要なのかということですが、僕はこのことをよく考えるんですが、未だによくわかっていません。

「国民的なレベルでのトラウマ現象」というのは、たとえばベトナム戦争に敗退したアメリカであるとか、それ以前にやはりベトナムに出兵して敗北したフランスであるとか、現象としていくつか挙げるのが可能です。また、一九三八年、ヨーロッパで第二次大戦が始まる直前に行われたミュンヘン会談で、ヒトラーはチェコのズデーテン地方の割譲を要求するわけですが、とりわけフランスやイギリスがヒトラー懐柔策に出たことよってとんでもない被害を後からもたらされてしまったという事実があります。それは今日、たとえばNATOがミロシェヴィッチの旧ユーゴスラヴィアを爆撃する時や、アメリカがサダム・フセインのイラクを攻撃する時の一つの正当化の根拠に使われている——悪を野放しにしておくが大変なことになるから、あらかじめぶつぶつぶしておかなくちゃいけない。これを、ヨーロッパのトラウマが回帰してきているような状態だと言うことができると思います。

そういういった現象を考えると、心理学でも使われているトラウマ概念は、それが単なるメタファーやアナロジではないとすれば、認識論的にどういうステータスをもち得るのだろうか。こういうことに関して、ご専門の方から

意見をいただければありがたいと思います。国家に広がるようなトラウマが成立するために必要な条件として、一つ僕が考えているのは、歴史的なことです。とりわけヨーロッパに端を発した近代国民国家というのは、それまで国家と個人の中間に介在していた、ヨーロッパで言えばギルドや職業団体を一切取り払い、原則として、個人と国家がいきなり向き合う構造をつくり上げました。これは近代市民革命の一つの結果です。それはフランスの構造としては、たとえば我々一人ひとりが国家の政治を動かす形での参政権となつて現れます。マイナスの構造としては、先般問題になってきている近代戦争、つまり職業軍人が国を守るのではなくて、徴兵制によって市民すべてが自分で自分の国を守るという発想を生みます。したがって、近代戦争はそれに正義があるうがなからうが、当然、不条理な死を産出し続けるわけです。逆に言えば、死の不条理さゆえに、高橋さんが指摘されたような戦死者を英雄とか尊い犠牲という名の下に祀るという国家的なメカニズムが動きだします。そして、本当は無意味かもしれない死に象徴的な意味を与え、それによって国民国家を我々一人ひとりの運命共同体のような存在として成立させます。先ほど個人と国家がいきなり向き合うと申しましたが、近代国民国家というのは個人とそれを守る最も大事な下部組織として、家族を持つております。高橋さんが極めて明確に示されたように、個人が自分の国を守るのと同様、戦死者となつた者を送つた家族が事後的に榮譽を得るといふこのメカニズムは、恐ら

く近代国家の本質に属するだろうと思われれます。たとえばベトナム戦争の敗北といったトラウマとなる出来事が、かなりの部分「国民」に共有されてしまう。これは近代以前にはなかつた現象でしょうし、日本の敗戦はどういうふうにかえたらいいのかということも、こういったトラウマ概念から出発するべきではないでしょうか。

最後に申し上げたいのは、トラウマという言葉を聞くと、どうしても被害者側のことを僕は想像しがちですが、戦争の場合、むしろ加害者トラウマのほうが問題になるのではないだろうかということです。たとえば先般のイラク戦争のときの虐待——これは torture という英語なので、正確には拷問ですね——、こういうことが、逆に言えばアメリカ「国民」のトラウマになり得るでしょう。そういった共同体レベルでのトラウマの問題があります。共同体というのは残念ながら医者にかかることができませんので、これはレベルとしては全く同じというわけにはいかないだろうということとはわかります。しかし、トラウマ概念がある程度同じ有効性を持っていると思つています。ただ、それがどこまでどう有効なのかということは僕自身もまだわかつていません。

横山：本質的な問題を提起していただきました。のちほどまた先生方にお答えいただきたいと思つています。もうお一人の指定討論者は中井久夫先生にお願いしております。

中井：まず、港道先生が言われたことについて追加しておきたいと思います。アメリカ復員局は二〇年前から加害者のPTSDをも補償し治療するとしております。実際、アラシ・ヤング (Allan Young) の『PTSDの医療人類学』(みずす書房) に出てくるケースの過半数は加害者です。そして、加害者のPTSDのほうが被害者のPTSDより重い。この事実は、我々人間にとってささやかな救いです。

それから、歴史とトラウマですけれども、モードリス・エクスタインズ (Modris Eksteins) という人の『春の祭典——第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』(TBSブリタニカ出版) は、トラウマの問題をベースにして書かれた本です。それによると、第一次大戦においてヨーロッパが崩壊した時のトラウマが、ミュンヘン会談という、ヒトラーに対する妥協を歓迎させたということです。現在の米国でも、慎重派はむしろベトナム戦争を経験した人ではないでしょうか。第二次大戦でフランスが非常に早期に降伏したのも、第一次大戦のトラウマと、人口を保存するという合理的な判断があったためです。そういうものが最近注目されております。

徴兵された兵隊が敵に向かって鉄砲を撃つ確率というのは、南北戦争から第二次大戦までは一五から二〇%でした。つまり八〇%は敵に向かって撃たないんです。戦闘機は、わずか一%のパイロットが四〇%の敵機を撃墜しているそうです。大部分のパイロットは、戦場で敵を撃つよりもむしろ撃たれるほうを選ぶんです。兵隊の場合もそうで、このこ

とは我々人間にとって一つの救いです。しかしこれでは軍隊にとって非常に具合が悪いので、一九四六年アメリカのウリアム少将が海軍の心理学者に命じて、心理学的テクニクによって発砲率を上げようとした。このテクニクはデーヴ・グロスマン (David A. Grossman) の『戦争における「人殺し」の心理学』(筑摩書房) という本に詳しく紹介されております。朝鮮戦争で五五%、ベトナム戦争では一七才の少年を選んで九五%の発砲率を達成しました。その代価は、その後のアメリカ社会の荒廃であろうと考えます。

湾岸戦争の発砲率は、『ニューズウィーク』によると二四%。今回のイラク戦争でも、イラク兵と米軍の車がすれ違う場面が出てきますが、米兵は朝日の記者に「弾は当たらんもんだよなあ」とか「実に当たらん」と言い、イラク側も当てずにそのまま過ぎていくんですね。恐らく、高橋先生が引用された靖国神社を肯定している遺族の方の夫も、フィリピン戦線の一九四五年六月といえは、敵兵を一人も殺していないでしょう。

この靖国神社肯定の遺族は、犯罪や天災の被害者の心理と一緒です。一つは、忘れられたくないという感情です。靖国神社がなくなったら全く忘れられるんじゃないかという恐れがあるのです。これは理不尽に家族を失った人の反応の一つです。もう一つは、理不尽さの意味付けです。たとえば、ある事故で誰かが亡くなって、それによって事故を起こした箇所が改善されるとします。そうするとそれは「無駄な死じゃなかった」となります。そういう意味付けを、

人間はどうしてもしてしまいます。そして、「忘れない」と「忘れられたくない」とのせめぎ合いが心のなかで起こって、結局はそれが浄化の過程になると私は思います。

私は、戦時下の小学生として靖国神社の春と秋の大祭のラジオ中継放送を聞いております。それは本当に悲痛なものと感じました。アナウンサーも全然勇ましいことはありません。ただ、肯定している遺族も本当はそれで満足しているわけではないと思います。その現場にどんな僻地であろうと繰り返し行ったり、戦死の真相を徹底的に調べようとする。これは、犯罪の被害者が心理の徹底的な究明を要求し、少年の事案ですと多額の費用を支払って民事訴訟を起こしてまで鑑定書を読もうとする——それが立ち直りの一助になるんですけれども——それと同じだと思います。

吉田満の『戦艦大和ノ最後』（講談社）という本を読まれた方があると思いますけれども、最後に大和で出撃する学徒兵たちのあいだに、「何のために死ぬんだ」という激論が起ります。「新生日本のために死ぬ」、これでみんな一致するんですね。その新生日本に彼らはいない。だけれど、そういう意味付けなしに人間は生きていけないし、死ぬないんです。ただ、この見解を述べた白淵大尉という学徒兵は敗戦を見通していて、それを踏まえての「新生日本」であつたらうと私は思います。靖国神社問題というのは感情の問題であるということをいみじくも高橋先生は言われた。靖国の感情というのは、福沢諭吉以来、人間のこころに添うものとしてつくられていったんでしょね。

ところで、現在言われている戦争のPTSDは、私が知っている限りでは、二回の世界大戦がモデルで、これは正規軍対正規軍の戦争です。通常、正規軍同士の間は意外に短期間に終わります。実際に戦闘を行う前線と違って、大部分は後方として安心していられます。しかし、こうした「対称戦争」は恐らく今後起こらないと思います。

一方、「非対称戦争」と呼ばれるものは、ゲリラ戦、人命を顧みない武装勢力との戦いですが、これはどの方向から、いつ、どういう形で攻撃が来るかわからない。前線も後方もないんです。これがどういう心理的打撃を与えるかは想像できませんけれども、私はレポートを読んでおりません。非対称戦争には残虐行為はつきもので、ほとんど生理的なレベルで発生します。なぜなら、攻撃者と一般市民との区別が付かないからです。先制攻撃をやらなければ自分がやられる。やられる前にやるというロジックがある限りは、残虐行為は起こります。

さらに、内戦というのはほとんどの時代にある。毎日新聞で連載されている『哀歌』という曾野綾子の小説がもう終わりに近づいていますけれど、あれはルワンダの内戦の物語です。フツ族とツチ族が戦っていますが、この二つの部族は言葉も一緒で、我々には全く区別が付きません。内戦はほんとうに悲惨です。どちらも相手を加害者と考えているからです。私は、朝鮮戦争の内戦で日本に亡命してきた方から聞いたことがあります、「外国との戦争はどれだけいい(ましな)ことか。顔が同じ、昨日までは友達でも、

思想が変わっていて殺されるかもしれない。殺される前にやれということになってしまう。内戦というのとはとても大変なんですよ」と語っていました。

加藤先生と白川先生のお仕事については、私の次の世代あるいは次の次の世代がこういうふうに一生涯懸命やってこられることに敬意を表する、それに尽きます。私はもうこの年からやるわけにはいきません。多分、一つの世代が一つの課題を片づけていく、それでいいでしょう。十分果たしたとは思いませんけれども、私は古希を過ぎました。それでは。。。

横山：ありがとうございます。港道先生と中井先生から、シンポジストの先生方に問いかけがありました。お二人のご発言に対しての、シンポジストの先生方からのお答えをいただいています。

白川：私は個人のトラウマを診ている者ではありませんが、港道先生、中井久夫先生のお話を聞かせていただいています、やはり共同体の問題とか国家の問題というのにも、とても心をひかれると感じました。港道先生のおっしゃった加害者側の問題であるとか「共同体は医者にかかれぬ」というのには本当にうなずいてしまいました。

それから私自身も、森先生のおっしゃった攻撃者との同一化とかトラウマの再演問題を考えるなかで、加害者の問題は取り組まないといけない重要な問題だと感じています。たと

えば性虐待一つとっても、私の診ていた数だけ被害者がいて、その加害者は一説によると生涯のうちに数一〇人から一〇〇人の被害者を出すといわれています。そして被害者は再被害をうけたり、加害をしたり、性的な行動化をしたりしてそれらの再演の中で育った子どもがまた一〇代のうちに子どもを産んで、またその家庭が崩壊していくということを目の当たりにしています。それはとても怖いことです。

この間、横浜でDV・児童虐待関係のシンポジウムがありました、そこに二人の男性が見えました。アメリカのシルバマン博士 (Jay G. Silverman) という公衆衛生の専門家と、バンクロフト (Lundy Bancroft) さんという児童虐待調査官で、加害者のカウンセリング、加害者対策をしている方たちです。アメリカでDV・児童虐待問題が公衆衛生的な問題としてとらえられ始めたのは七〇年代からだそうです。八〇年代からしっかりと取り組み始められて、加害者のためのプログラムもいろいろ行なわれています。

私がお二人に伺ったのは、「三〇年加害者対策をやって、DVは減ったか」ということです。たとえば、天然痘は撲滅されました。エイズも減っています。それと同じように、この虐待の連鎖——私は怒りと憎しみだといつも言っています——が減ったのか。彼らから、非常に興味深い答えが返ってきました。DVそのものは、地域的に非常に強力なプログラムをやったところでは減っているというんですね。けれども全体的には減っていない。特に家庭の中の殺人の数は全く同じなんです。彼らの考えでは、再演を止めるため

には最低二世代必要です。なぜなら虐待の連鎖には、外傷性記憶の再演だけではなくて、妻を殴る夫を見ていた男の子が大きくなって妻を殴るといふ認知行動パターンの学習による再演も含まれているからです。

児童虐待の加害者である母親を私は診ているんですけども、彼女たちの多くは自分がかつて被害者で、PTSDになっっているんですね。そういう方たちは社会的全般的に機能不全に陥っています。それは治療することによって回復します。ただ、DVの加害者の方には同じようなアプローチでは、手が付けられない。DVの加害者の一部は、社会的には十分機能できるのに、自分の身内だけに暴力を振るってしまうのです。これについて、シルバーマン博士らはやはり、「学習の問題である」と言っています。森先生もおっしゃっていましたけれど、加害者の問題はトラウマ治療ではなくて学習でやるしかないんだと。アメリカではアンガー・マネジメント（怒りのコントロール法）などいろいろなプログラムを通じて、加害者治療をしているそうで、日本でも一部ではじまっています。また、早期からの人権教育が必要だと感じます。

これ以上のことは私にはわからないのではかの先生にお譲りし、一つの問題提起として、戦争の話と家庭の中のことをつなぐものとして提示させていただきました。

森

：今の白川先生のお話に触発されて発言します。トラウマという概念が述べられるときに、トラウマの特徴として

最もよく指摘され、またわかりやすいのはトラウマ性記憶の性質なんです。

トラウマ性記憶という独特の記憶の在り方は、トラウマというものの性質を非常によく表しています。そのためにこれがよく取り上げられますが、記憶がトラウマのすべてではないと強く感じています。被害―加害の構造をはじめ、トラウマの周辺に広がるさまざまな現象があり、しかもそれは決して副次的ではなくて、本質的なものとして互いに絡み合っている。その全体がトラウマ現象です。その中に、今、白川先生も言われた学習の問題―あるものが条件付けの形で学習され、それが反復される現象―も関わっているのではないかという気がします。

そして学習の部分はいくら過去のトラウマの記憶を扱っても変わらない。教育であつたりトレーニングであつたり、行動を変えるための治療であつたり、記憶へのアプローチ以外の方策でなければ変えられないものは、非常にたくさんあるのではないのでしょうか。そういう点では、教育の課題でもあり、養育の課題でもあり、治療の範囲で済まないと思います。

高橋

：加藤先生が最初に災害について取り上げられました。これは地震や台風や洪水のような自然災害の場合もあるでしょうし、飛行機事故とか人災の場合もあるでしょう。あるいは両者必ずしも分けられない場合もあるでしょう。けれどもそういう災害の場合と、DVや虐待といった問題、

それから戦争やそれに準ずるたとえればルワンダの虐殺のようなケース、政治が絡んでいるようなケース、こういったさまざまなレベルでトラウマの問題が今論じられています。私の印象では、これらはいずれも各種の主体にとって「死」なわけです。靖国の遺族の場合であれば、家族の戦死というものが喪失として経験されるわけです。意味付けの働きは、そのある種の喪失に対して何らかの埋め合わせをしないと行けないということで、動員されてくるのではないかと思うんです。

私は専門家ではありませんので素人くさい表現で言っているんですけども、その場合に、国家の戦争であれば先ほど私が申し上げたような論理やレトリックが働き始める。何らかの物語や意味付けの作用がそこに働いて、もともと全く虚しいとしか感じられなかったような経験に、意味が与えられる。あるいは加害者とか社会がそれに対して与えていた意味や物語に対して変更が加えられる。そういうふうにして喪失の虚しさというものが何らかの形で埋められる。そうすることによってある一定のノーマライゼーションとていうのか、ある種の治癒がそこにもたらされるわけです。しかしその意味や物語の自身について考えてみると、国家や政治が問題になるレベルでは必ずそこに対立が生じてくるし、恐らく虐待のような場面でも、その意味を確定することは非常に難しいのではないかと、私などは想像するんです。

自然災害の場合、それによる喪失をどうやって受け入れ

ればいいのか、どう意味付けて納得すればいいのかということは、もしかすると一番難しいのかもしれない。そういう問題がここに共通にあるような気がします。

加藤：今日のお話の中で、誰をケアするのか、誰に対して埋め合わせをするのかという問題があって、直接の被害者、被災者に対するケアがまず必要だということが大前提になっています。それに関して、私はケアする人間とその受ける側との乖離について申し上げました。もうひとつ付け加えると、周辺にある人たちをどうサポートするかということが別のテーマになってくると思うんですね。

一つは遺族ですね。直接の被害者でなくて、それによって家族を失った方たちに対するサポートです。これは非常に難しい問題で、僕は日々の臨床の中でたくさんケースを看ていますけれども、非常に疲れ果てますし、本当にどうしていいのかわからないということがあります。ただ、今日の戦争の遺族の方のお話も参考にしながら考えると、どう彼らに対して埋め合わせをするかということに尽きるんだと思います。彼らは、単に埋め合わせをしてほしいのではないということをよく言います。彼らがよく言うのは、「同じような思いをほかの人にさせたくない」ということです。同じようなことが起こると、それが引き金（リマインダー）になって自分もそのことを思い出してしまふ。だから、何とかそれを予防するシステムをつくってほしい、そして、自分たちをその中心に置いてほしいという

ふうに、尊厳やアイデンティティーの回復を求められるところがあります。ですから、その辺をきちんとくみ取るような制度をつくらなければならないんだと思います。

あと、加害者のことがたくさん話の中に出てきました。加害者も被害者であるという連鎖の中で、彼らをどうケアするかということについては、僕はあまりなす術をもちません。システムとして加害者に対してケアを提供する術がないので、なかなか手が出せないというのが現状です。僕はこれに関しては生半可なことは言えません。

もう一つ今日の話題に関連して、さつき楽屋で白川先生と話している中で思ったのですけれども、ケアするべき対象としてこれも忘れてならないのは救援者であり、指導者であると思います。私とか白川先生を見ていただくとかかるんですけど、疲れ果てるんですね。こういう人間をどうサポートするのも、やっぱり忘れてはならないことです。このように直接の被害者だけではなく、周辺の人間をどうサポートするのか、そういったことを考えない限りは、トラウマを扱っていき、かつ支援していくという全体の問題が底上げされていないんじゃないかと思いました。

横山：どうもありがとうございました。中井先生のほうから何か。

中井：トラウマと歴史について、ちょっと追加しておきたいと思います。トラウマと歴史との関係は単純ではありません

ん。ヒトラーも戦傷兵です。毒ガスにやられ、塹壕のたこつぽの上を戦車が通過しています。エクステインズという人は、ヒトラーが毒ガスでやられたためにユダヤ人を毒ガスで殺したんだと結びつけています。それはまあ短絡的に過ぎますが。

東条英機大将は太平洋戦争の開戦のときの首相です。これは多分歴史家あまり言っていないことですが、東条英機大将には非常なトラウマがありました。彼の父親英教中将は、公平中庸で合理的な人だったんですが、日露戦争のときに怯懦（卑怯）の故をもって職を免ぜられています。これは日露戦争でただ一人の将官の免職です。陸軍部内では、能役者の家柄である東条家をそれ故に軽蔑しているところがありました。そのとき東条英機は士官学校の二年生で、練り上げ卒業になる前でした。東条という人は、心理的に引くに引けない傷をもっていたと思います。それが開戦の原因であると単純には言えませんが。一般に、戦争直前になったら引くことよりも進むことの方が非常に易しいということですよ。

しかし、戦後五〇年の平和で、戦争に対して非常な嫌悪感を示すのが旧軍人も含む戦争経験者です。歴史の示すところによると、戦争を知っている世代が第一線から退くか死滅するときに、次の戦争が始まっています。記憶には、伝えられるものもあるけれど伝えられないものもあるのですね。戦後五〇年の平和は、戦争のトラウマによって支えられてきた面があると思います。

森

：今の中井先生のお話に関連して考えていることがあります。戦争を知っている人たちが亡くなった頃に次の戦争が起ころうということは、記憶がなくなるから起ころう面と並んで、もう一つ別の側面があるように思います。ちょうど日本の戦後がそうであったように、戦争の記憶を知っている人たちが生きていた時代は、戦争の記憶をいわば埋葬して、つまり見えない形にして、その代わりにトラウマを扱うために何か別の物語をつくっている時代でもある。日本の場合には高度成長時代の経済成長によって回復するという成長物語をずっと生きてきたわけです。しかしその底には敗戦の惨めさとか無力感といったものがあつたに違いありません。その背後の無力感は、高度成長を何かいびつな形にしている、そのいびつさが次の世代に強いストレスを与えてきたのかもしれない。過度の競争心を生み出したかもしれない。あるいは物質的繁栄だけを指すような精神構造をつくったかもしれない。そういう面と、本当に忘れてまた次の事件が起こってしまう面と、両方の面があるのかなと思つて聞いておりました。

これは高橋先生の先ほどのお話にも関連します。戦後の成長期の例のように、絶望的で悲惨な状態にあるときに、ある物語をつくりだして生き延びることがありますが、物語をつくるということは、トラウマ治療の議論で治療的な作用として取り上げられます。自分なりの物語をつくって、体験を自分の物語に組み込んでいくことが回復の鍵である

と。しかしその物語が、果たしてトラウマを十分扱った物語なのかどうか、トラウマの回避のための物語ではないのか、そこを判定するのが非常に難しい。結果論でしか言えないものかもしれない。靖国の母たちも、一つの物語の中に生きていくわけですから、その物語はトラウマを本当の意味で処理し切れていくわけではないでしょう。ですから、少しそれにひびが入るとドッと血が流れ出す。もつと別の形でトラウマを扱った物語をつくりあげて生きている人もいます。そのあたりの差が、本当は一番大事なことではないかと思つて聞いていました。

中井：それはいかにもと思います。平和憲法を当時の私たちは一種の「みそぎ」のように受け取っていたのかなと思います。日本側が出した憲法草案はいかにも未練たらしめると感じました。軍事国家の破綻した歴史との絶縁のためにはこれくらいは必要だったのだから——と。当時の首相たちも、本心はともかく、絶対平和主義を語っていました。アメリカ占領軍が押しつけたといわれるけれども、アメリカはアメリカでストーリーを描いていて、第二次世界大戦は「よい戦争」だという世論を維持することもあり、またほとんどアメリカ一国で日本を占領支配するための根拠というか意味もあつたと思うのです。国連の設立も同じライオンの上にあるでしょうか。その後、アメリカも日本もそれぞれのストーリーを曲げたり、空文化せざるを得なくなつてゆく——。

日本政府は日米交渉の中で実に巧妙に平和憲法を楯にとっておきながら経済競争に進むわけです。一九八〇年代の日本の経済界の大家から「ついに戦友たちの仇をとった」ときいたことがあります。同じ時期のアメリカの対日憎悪はかなりすごかったと思います。

港道：同じラインでちよつと一言挟ませていただきたいんですけど、たとえば司馬遼太郎のような歴史小説が果たした役割はかなり大きいと思うんですね。サラリーマンが幕末の戦士に自己同一化することによって、経済競争を勝ち抜いていくという。対アメリカということでもあったでしょうけれども、経済協力の名の下に東南アジアにどんどん進出していく。これはひょつとして大東亜共栄圏の反復ではなかったのかという見方もできるわけです。

もう一つ、さつき森さんと白川さんがおっしゃった「学習」の問題で、トラウマ性の記憶を取り巻くものが実は大事なんだということについてですが、僕と森さんが一緒に読んでいるニコラ・アブラハム (Nicolas Abraham)、マリ・ア・トロク (Maria Torok) の論文の中に、自分は当事者じゃないトラウマが襲ってくるという例があります。

たとえば、自分にとって、おじいさんやおばあさんの代に起きたことなどがそうです。両親にとっては当事者としてのトラウマだったけれども、さらに一世代下がった自分には全く当事者ではない。そのようなトラウマが襲ってくる

ことがあると。ある意味では、埋葬と亡霊という言い方を厳密に取るならばそこまで行くべきなんじゃないか。自分が当事者である過去をうまく埋葬できなかったから、成仏しない過去がワツと還ってくるというイメージをもう一歩先に進めて、自分が当事者ではない亡霊が襲ってくる——いわばゆきずりの誰かの夢に武将の霊が登場する、夢幻能のような構造ですね。別にゆきずりの人は武将の霊と何も関係ないわけだけでも、場として取り憑かれてしまうという構造のイメージを想い浮かべていました。

森：おそらく白川先生が数多くの症例でそういった世代を超えた連鎖を感じておられるかと思いますが、いかがですか。

白川：そうですね。ゆきずりの治療者として、よみがえる亡霊には何度も立ち会わせてもらっています。先ほど港道先生がおっしゃった夢幻能のようなことは体験します。過去の何かが蘇ってきて語り、それを聞いているという構造は、セラピーの中には常にあると思います。私はケースを出しましたけれども、あの背景にも、沖繩戦であったり、その後DVであったり、虐待の連鎖であったり、幾つもの問題がありました。

私は、DVの被害者のグループ、性虐待の被害者のグループなど、グループを幾つかやっています。その方たちが回復過程で非常に元気になっていくのを見てみると、少し楽観的にもなります。彼女たちがどうなっていくかとい

うと、自助グループをつくったり、先ほどもちょっと言いましたけれどもステップハウスをつくらうとしたり、シエルトアをつくらうとしたりし始めます。DVのグループをはじめ、みんなとても明るくて、みんなでゲラゲラ笑いながら、「ひどい目に遭った。ひどい目に遭った」と言いあいます。訴訟のこととか子どもからの暴力のこととか夫の恐ろしい仕打ちとかを語って、時には偏見にさらされながらも、本当にたくましくなってくるのがとてもいいなと思っています。彼女たちは、自分の傷をしっかりと思つているんですよ。そこが、ちょっと違うと思います。私は、PTSDというのは回復過程だと思つて、私には、「記憶が出てきてしまう」というところから、回復は始まるのです。

「レイプ・トラウマ症候群 (Rape Trauma Syndrome)」という論文を書いたバージェス (A.W. Burgess) が、PTSDにおける未発症の病態というのを書いていて、それが非常に面白いんです。病態のうちの一方は攻撃型です。どんなふうになるかというと、覚醒剤系の非常に強いアッパーの薬を使ったり、暴力をふるったり、反社会的な行動や性的逸脱などをしたりするんですね。もう一方は内にこもるタイプで、引きこもってしまったり、シンナーやマイナーなどのダウナーに依存したり、身体化症状が出てきたりします。発症していないというのは、実はすごく大変なことなんです。外傷性の記憶にずっと蓋をしているような状態で、いろんな問題行動が現れるんです。

それを思うと、先ほどの日本の抱えている無力感の話は、

また違った視点で見えてきます。高度成長という物語を描ききれなかった、バブルで崩壊した私たちとして。トラウマを扱っている治療者の中で、日本PTSD論というのが話題になったことがあるんですね。個人の病理を共同体に適用できるかどうかは別として、まあお話としてはおもしろい。こんなストーリーです。日本は敗戦を終戦と呼んだ、それも、広島・長崎があったから自分は被害者であって、被害者の立場で「終戦」と言った。それで「自分たちはもう繰り返しません。戦争を二度としません」というふうには憲法に書いたんですよ。その中で高度成長が始まって、頑張るぞ、頑張るぞと男の人は企業戦士になりました。自分たちは戦争はしなかったけれど。それと同時に、家ではお母さんと子どもが密室に閉じこめられました。しかもコミュニティが壊れてしまっている。そこで児童虐待とかDVということが繰り返されてきたわけです。ようやく、DV、児童虐待問題が外に出てくるようになった今が、私はチャンスなんじゃないかと思つています。「やっとなんかPTSDになったじゃないですか。これからですよ」と、私は思うんです。

私はフランスに住んでいたとき、いろいろな国の方と会いました。その中で、ドイツの方たちに非常に深い印象を受けました。私がお会したのはフランスで勉強されたり仕事をされたりしているわけですから知的な能力の高い方だと思っただけでも、みんなものすごい罪悪感をもっているんです。それで、それをあからさまに語るんです。

ね。「ドイツ人であることで非常に肩身が狭いんだ」と。私の会った人だけなのかもしれないですけど、彼らは自分たちの罪悪感や傷つきをしっかりと見つけていました。ナチス・ドイツの存在で戦争責任について考えざるを得なかった。ドイツでは、司法改革がすごく進み、非常に開かれた裁判所になったと聞いているのですが、こういう思潮が関係しているのではないのでしょうか。一方、日本では、裁判所の閉ざされた形態は宮々として変わらない。それは、戦争の亡霊を引きずっているように私にはみえる。トラウマを受けるとか、見るとか、直視する、あるいは「気づく」すなわち「傷つく」ことから始めるしかないのかなと思いますね。

話が広がっちゃいましたけれども、やっぱりいろんなところで戦争が起きていて、憎しみがあるわけです。それは経済の問題も非常に大きいし、イラン・イラクの問題や、イスラムとそれを圧制する勢力の問題などがありますけれども、単に民族の違いとか宗教の違いだけではこんなことは起きないと思う。そこをどう見ていくのかということはあるすごく大事なことです。何で私たちが傷ついているのかということ、それぞれの国民が認めることですね。

加藤：今の白川先生のお話で思い出しただんですけど、確かに日本は、戦争については被害者だというアイデンティティーを持ち続けているんですね。これはどうも世界的には非常に違和感のあることらしくて、私は、有名なトラウマの研究者ヴァン・デア・コルク (Bessel A. van der Kolk)

という人から議論をふっかけられたことがあります。彼はオランダ人で、自分のおじいさんの世代が日本軍からひどい目に遭ったらしいんです。「日本はあれだけの加害体験をしたのに、それにどうして目をつぶっているんだ。自分たちが被害者かのように靖国神社みたいなものをつくって、加害者のことはどうなんだ」とふっかけられて、僕は言葉に窮して何も言うことができなかつたという体験があります。これは、彼が書いた『トラウマティック・ストレス』（誠信書房）という本の日本語の序文にも非常に鮮烈に書いてあることなんですけども、歴史の中で考えるうえで、特に日本は、周辺国に与えた加害者としての責任といえますか、トラウマを与えたということについても光を当てない限りは、日本の戦争の体験を話すスタートラインに立てないんじゃないかという気がするんですね。

多分、アメリカがベトナム戦争をこれだけ引きずっているのも、彼らが中途半端にベトナム帰還兵は被害者であると言っているからではないかと思えます。しかし彼らは加害者だったんです。そこに目を向けられない限りはその問題はやっぱり解決しないと思います。この暗い部分にきちっと光を当ててはじめて、トラウマを歴史の中で位置付けるということが考えられるんじゃないかなと思います。

高橋：テオドル・アドルノ (Theodor Wiesengrund Adorno) というユダヤ系の哲学者で、ナチスの迫害を逃れてアメリカに亡命して戦後ドイツに戻った哲学者がいます。この人が、

ドイツ人、つまり加害者のほうが、もう過去のことを忘れよう、いつまでもそんなことを気にしなくてもいいじゃないかと言いはじめると批判する文章を、すでに一九五〇年代に書いています。それから、六〇年代末ぐらいだったと思います。ミッチャーリヒ (Mitscherlich) 夫妻という精神分析家が、『震われた悲哀——ファシズムの精神構造』(河出書房新社)の中で、悲しむことができないのが戦後のドイツ国民だと言っています。つまり、あれだけの暴力的な支配と戦争、そして虐殺を行なったドイツ国民が、戦後あたかもそのことがまるでなかったかのように、自分たちの過去を否認して経済成長に突き進んできた。まさに日本と同じですね。しかしミッチャーリヒは、いくらそのようにして蓋をしても、あれだけの血を流した過去がある以上、必ず亡霊が立ち返ってくるというようなことを言っていたわけです。

私の知る限りでは七〇年代ぐらいから、ドイツでは過去を直視するというような作業が、まさに今白川さんがおっしゃったような多様なレベルやジャンルで行なわれてきています。そのような中でドイツは今日のスタンスを確立したように思います。そういう意味でも、このトラウマとか精神分析にかかわる概念がドイツ——もともと精神分析はドイツ語圏で起こったわけですけども——の戦後の意識を解釈するために使われてきたということは参考になると思います。

もう一つは、さつき港道さんが、自分が当事者ではない出来事についてのトラウマの問題ということをおっしゃい

ました。私が論じた問題というのは、そういう角度から言いますと、要するに「国民」あるいは「ネーション」という観念、「日本」あるいは「日本国民」という観念は、直接自分が戦争に参加したわけでもないし、虐殺に参加したわけではない戦後の世代にとつても、一つのトラウマ的な経験のきっかけになりうるのではないか、ということ。自分が属している国がかつて非道なことを行ない、しかも、先ほどから出ている言葉を使えば、加害者としての責任が十分に果たされていない。ならば自分が何かしなければいけないというふうに感じる。国民という観念はそういうツールにもなり得るわけです。ただ、その国民という観念は常に両義的なものです。逆にその国民のアイデンティティー、誇りとか栄光とか——近代のどんな国民国家でも必ず言ってきたことですけども——、それが日本の場合にはまだあまり批判にさらされていない面があって、それが過去の歴史を直視することを妨げているという面があるのではないか。

一つ伺いたいのですが、先ほど中井先生が遺族の感情には三つの要素があるとおっしゃいました。まず、靖国神社がなくなると忘れられるんじゃないかという恐怖心。それから意味付けへの希求。そして浄化を欲する気持ち。私も本当にその通りだと思います。しかしその場合、特に浄化というのは、加害者が自らの経験した出来事を浄化する。ことになるわけですね。まさに、靖国というものは浄化のシステムです。そこに一つの疑問がわいてきます。これが被

害者の浄化作業の場合、たとえば災害やDV、幼児の性虐待というようなケースで、被害者が自分に起こった出来事を直視して、ひどい目に遭ったということをお納得したうえで明るく前向きに生きていくという、つまりその出来事を、ひどい出来事だったけれども自分の人生の物語の中でポジティブに位置付けていくというか、そういう物語をつくってエンパワーメントしていくことになりませうね。これは一般的に言っていることだと思うのです。ただ、国民というツールを通じて過去の戦死者を常に英霊として浄化していくというレベルになってきますと、一体何がそこでポジティブな意味、前向きの意味付けになってくるのか、それが政治的に常に論争の対象になるわけです。そこが非常に難しいような気がするんですね。過去を直視して、その過去に肯定的な意味付けを与えないと人間というのは前に進めないものだとすると、靖国的な意味付けを突破するにはどうしたらいいのかと。つまり戦死者が大死にだったとか、無意味な死だったとか言われれば言われるほど遺族は反発する。それに対して浄化の作用をもつ物語を求めるという構造がある。ですから、そのあたりをいろんな問題のレベルやケースによってどういうふうに考えていったらいいのかということが、私にとっては大きな問題です。

港道：その議論の前に、高橋さんにお聞きしたいことがあります。靖国を問題にする、国民国家を問題にする以上、僕らは既に現実に国民国家の限界というのを感じていて、お

そらくそれは別のものに向かっているところでしょう。その一方で、あなたが「我々は恥入り続けなければならぬ」と書いたことに対して、藤原婦一さんは「戦争責任の国民化ではないか」というふうにお書きになっています。戦争責任を問題にすることが、逆に国民国家の凝集の論理にもなり得るという可能性があるのではないのでしょうか。

高橋：それはなり得ると思います。つまり、ここでの議論には一〇〇%の確実性というものは存在しないのではないかと思います。

たとえばドイツの場合でも、戦後すぐにカール・ヤスパース (Karl Jaspers) という哲学者が『罪の問題』(邦訳『責罪論』理想社) というのを書きました。ヤスパースとライバルだったハイデガー (Martin Heidegger) がナチにコミットしたのに対して、ヤスパースはお連れ合いがユダヤ人だったということもあるでしょうけれども、本人の思想的な立場からしてもナチスの時代には沈黙の抵抗を続けたわけですね。敗戦後は、ナチスに荷担しなかったにもかかわらず、自らはドイツ人としてドイツの罪の問題をまず考えなければいけないというので、有名な四つの罪——政治上の罪、法律上の罪、道徳上の罪、形而上の罪——という議論を展開したわけです。彼の議論は七〇年代以降のドイツの公的なスタンスにも相当取り入れられていて、たとえば一九八五年にヴァイツェッカー大統領が連邦議会で、第二次

大戦終結、つまりドイツの敗戦四〇周年の演説をした。これは非常に評価が高い演説なんですよけれども、その中でも私は影響が見られると思います。そこに流れているのは、「我々ドイツ人は過去を直視する道徳的の力があるんだ」、「我々は敗北したけれども、自らの誤りを直視して立ち直る精神的な力をもっているんだ」という誇りなんですね。これがたとえばヤスパースの場合ですと、まだドイツ魂とかドイツ精神という言葉で表現されるわけです。これは積極的に前向きな意味をもっているんだけれども、なおかつそこには一種のナショナリズムにつながる可能性があるわけですね。

そういうふうを考えますと、日本の場合でも、国民という単位で戦争責任を果たさなければいけないという議論にそういうナショナリズムに足をすくわれるリスクが全くないとは思いません。しかし逆に、先ほどから出ているように、日本のようにある種国民という観念が非常に強くて、敗戦によっていったん古い日本が崩壊したかのように見えただけでも実はそうではなくて戦前と戦後が必ずしも断絶していない場合には、むしろ戦争責任をきちっと直視することによって、その連続性を絶つことができるのではないかと思うんです。私としてはそちらのほうにかけたい。しかしそうするとまた、戦後の日本が平和国家だという平和主義の国民としての平和主義ナショナリズムが出てくる可能性もあるわけで、いずれにしても一〇〇%確実な議論は成り立たないような気がしています。

中井：私は、日露戦争をどう考えるかが一つのポイントだと思います。司馬史観によれば日露戦争までは「よい戦争」

ですね。アメリカ人が第二次世界大戦を「よい戦争」と考えているのと同じ意味で。私の子どもころには日露戦争参加者がまだ生きていて「今度の戦争（日中戦争）では皇軍でないぞ、ひどいことをしている」と語っていました。ではどこが違うか。一点だけ挙げれば、日露戦争以前と以後とは、近隣諸国のうらみを買っているか、いないか、それと他の帝国主義国を挑発しているかいないかだと思います。日露戦争の戦後処理はロシアから取れなかったものを中国から奪うというものでした。英国政府はさつそく抗議します。アメリカはフィリピン独立運動に手を焼いたので、領有支持と交換に韓国までは認めるが、それ以上は認めないということで、大艦隊が東京湾を訪問します。こうして、日本はにわかにアジアからも欧米からも孤立します。

横山：さて、戦争責任の問題に議論が及んできていますが、このあたりでそろそろ、フロアの皆さまのご意見も伺いたいと思います。どなたかいかがでしょうか。

発言者1：立命館大学の赤澤史朗先生が戦後の戦争責任ということで論じられたことがあります。そのときに、今の靖国の戦死者の問題というのは戦後常に問題になっていたわけではなくて、戦後すぐにはいったん忘却されているとい

ようなことを論じられています。戦死者というものは戦後日本において一回抹消せられて、その後思い出されいると。靖国問題にしても、戦後すぐではなくてしばらくたってから、七〇年代ぐらいになってから思い出されるようになってきています。

ところが、その時に思い出されたのはかつて靖国に祀られていた戦死者だけではなかった。同時に、空襲などで亡くなられた民間の人たちであるとか、あるいは戦死者の向こうにいた慰安婦であるとか、中国で殺された人たちが思い出されてきている。そうした人たちをどう扱うかということ、従来の戦死者だけの死者の共同体を守ろうとする靖国を護持しようとする人たちと、そういった新たに思い出された死者を含めて自分たちの戦争のトラウマをとらえようとする人たちとのあいだで、対立の軸が生まれてきたというような言い方をしています。

ひよつとしたら、かつて日本の戦争について考えたときには埋もれたまま思い出されることがなかった死者が蘇ってきて、それが、日本の戦争責任とか自分たちのかつての歴史を振り返ったときに新たに考えなければいけない問題として現れているのではないかと思いました。そういったところでも埋葬とか、かつて思い出されることがなかった死者が新たに思い出されてくるというような面はあるんじゃないかなということ、特に高橋先生の議論なんかを聞きながら思ったことを、参考になればということでも申しあげました。

横山：ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

発言者2：旧制姫路高等学校の中に忠魂碑があります。その前に、卒業生百数十名の戦死者がどこでどんな状況で戦死したのか全部調べて、その写真一〇〇枚―学生時代、あるいは軍隊にいたときのものを、全部同じ大きさで掲示してあります。そして、四回目ぐらいだと思いますが、今年の一月一日に慰霊祭を行ないました。遺族の方には全員に呼びかけて、一昨年も行ないました。

慰霊祭はなんのためにやるのでしょうか。私個人的には、二〇才のときに小学校の友達が約半数死に、高等学校の友達も数名死んだなかで、なぜ僕が生き延びて今ここにこうしているのか、彼らの死を、そして僕たちの戦った学徒出陣がどういう意味をもっていたのかを、はっきりさせたいなあと思っています。

三年ほど前ですが、私たちが学校の歴史をつくろうと取りかかったときに、東京大学から、私の高等学校の二年先輩であった某さんが果たして戦死だったのか、病気で死んだのか教えてくれというお話がありました。それを聞いて私は思いました。東京大学は膨大な金を一人の学生のために使っていると聞いているが、戦後六〇年近くたって自分たちの卒業生が戦死したのか病気で死んだのか把握していない。そして今頃になって調べようとしている。それも緊急にやってくれと。非常に情けないなあ、東京大学もすっかりしてほしいなあと思いました。

私たちも、遅まきながら戦死者のことを思い、それを本当の意味で意味付けたいと思っています。今日はいろいろ今後考えさせていただく資料を提供していただき、非常に参考になりました。ありがとうございます。

横山：貴重なご発言をありがとうございます。さて、シンポジストの方からも何かご意見ありましたらお願いします。

白川：高橋先生からの問いかけである、靖国が浄化システムになるのかどうかということについてちょっと考えてみたいと思います。靖国は確かに一つの装置であると思っただけですが、やはり「国体護持」という大きな物語のためにつくられたシステムである以上は、ひとりひとりのささやかな、すべての物語を含有することはできないと思うんですね。

人はどんなふうに癒されていくのか。今の忠魂碑をつくられた方の話にしても、私の知る人たちにしてもそうなのですが、運命を共有するよく知っている仲間と泣いたり笑ったりして癒されていくという過程を見ていったときに、コミュニティの力は本当に大事だと思えます。そのとき本当の感情というもの——雑誌に載ると言われてする対談のためでもなく、大きな物語のためでもないもの——が非常に大事になります。すなわち、ドグマのないメモリアルとかドグマのないコミュニティというのが、大事だと思えます。

これはちょっと個人的な話になりますが、私の祖父は七

三一部隊の部隊長だったので、そのことを何も言わずに死にました。私がパリにいるときに七三一部隊に関する常石敬一の本が出て、それを読んで初めて知ったんです。その中の一行に、石井さんの率いる十三の部隊のうちの防疫給水部隊長として彼の名前が載っていました。彼は細菌学者だったので、戦後は妻の故郷で開業しました。

彼は死ぬ間際、うわ言のように「私の仕事は水を奇麗にする仕事だった」と言うんですね。そして、「濾水器をつくりなさい」と言っつくり方を図に描いて教えてくれた。それがどんなシステムだったかというところ、いろんな大きさの小石がいっぱい描いてある。「これで細菌のレベルまでは濾せるんだ」と彼は言いました。「地震のときにも役に立つ」と。私が静岡県に住んでいることを考えたのかもしれない。でも今の私にとってそれはひとつのメタファーとして感じられるんです。私にとつての石のイメージは、一人ひとりの個人です。関係の中で語られ表現され、癒される、そういう濾水器のなかを流れていくうちに汚れが浄化されていくというイメージがトラウマ臨床をするなかでうまれてきたのです。あるいはそういうイメージを持つことで、私は語らずにいった人を自分なりに語らしめ、浄化の作業、あるいは鎮魂をしているのかもしれない。私の父が長男で、私はその長女だったということもあって、ずっと祖父に向かい合って生きてきました。ですからこんなふうに思うんです。

そのコミュニティの力とドグマのないメモリアルの重要性ということに加えて、私がもう一つ思っていることが

あります。外傷の回復者の中で、死生観が変わる方がいるんですね。押し付けられているのではなく、自分がこの生を選んで生まれてきたんだと、自分の魂がこの体験を選んできたんだという意識をもたれるようになる方がいます。もしかしたら、そういう意識をもつて人が生きることがようになったら、何かが少し変わるんじゃないかという気がします。もちろんこれはとても時間がかかることですが。以上です。ありがとうございます。

森

：今日のテーマに関して活発なディスカッションがされてきて、内容的には十分だと思いますので、ちょっとそこから離れる話をさせてください。今回のシンポジウムは、国レベルの研究組織である兵庫県こころのケアセンターとの共催で開かせていただきました。これからもそちらと連携して研究活動をしていきたいと思っっているわけですが、今のところ、おそらくこころのケアセンターの研究課題に兵庫県のコミュニティーにおける戦争トラウマの問題は入っていないと思います。震災以後の話、あるいは児童虐待の問題は入っていますけれども。

今日は期せずして話が戦争に向いましたが、これは偶然の流れではなくて、きわめて必然的なものではないかと思えます。日本のトラウマを考えていると、その背後にある戦争の問題にどうしてもぶち当たる。震災のことを考えても戦争まですぐ遡ってしまう。戦争というものの破壊性、戦争に至る明治からの日本のトラウマを抜きにしては、な

かなかトラウマの話ができないというのが実際じゃないかと思うんです。

そう考えると、日本を代表するトラウマの研究機関であるこころのケアセンターは、戦争のケアも扱わねばならないのではないか。ただ公立の機関であることを考えますと、実際には難しいことかもしれません。今日は私立大学という場でこういうシンポジウムを開き、公のライブで自由に戦争について語り合ったわけですけども、こころのケアセンターで戦争について語るということは可能なのか、戦争責任、靖国問題について語ることは可能なのか——そういうことを考えますと難しいのかもしれないと思います。しかし、少し違う立場にありながらも、協力して相補いながら研究活動が続けていきたいと思っるところです。その辺りについて、加藤先生から一言いただけませんか。ようか。

加藤

：共催を引き受けたのはこういった意味があったのかと、今、思いました。私は戦争のことをせひやりたいとずっと思っっておりまして、師である中井先生にお願いして来ていただいているのは、その辺を考えたという強い思いがあったからでもあります。個人的にはやはり日本人の中で変な形で埋葬されてしまった戦争と、そのトラウマということを将来的には扱っていきたいと考えています。

横山

：どうもありがとうございます。歴史上の意図、とりわけ戦争が生み出すトラウマ、それ

から日本にとって非常に重大な戦争責任、それにまつわる靖国の問題、そして個人にさまざまな過程で受ける心理的外傷、こういうものが今ますます重要になってきておりまして、これから歴史的にも政治的にも、個人においても重要な課題になってきております。今日のシンポジウムが、皆様方がお考えになっていく一つのきっかけになればと思います。これをもつて「トラウマ概念の再吟味——埋葬と亡霊」のシンポジウムを終了します。最後に、お忙しいなか遠くから来ていただいたシンポジストの先生方に、拍手をもちましてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。